唯□有

死∜

奮% 0 **霍**% 0

に

赴認

11

死し1 を

辞じ2 せ

ず

尊.

鞠きっきゅう

応ま

至しそん

に

酬^むく

に

に

あって、 (第一:二句)

(第三·四句) 一朝有事の際は、勇み 奮って死地に赴き、熱血慷慨の気を もって、正義人道のために尽くすの ことを心がけるべきである。んで、ただ至尊のためにお酬日本人として生まれた以上、 あれこれ論ずる必要はな いすっつ 、 気 気 あ み する (1

て忠義を貫いた、楠君のために仇を討っ君のために仇を討っ (第五・六 句

(第七・八句) 国を憂い、世を憤いい、かの安政の大獄に、とり乱いい、かの安政の大獄に、とり乱いい、かのちらわれである。

(第九・十句) さらに述 (第九・十句) さらに述 公正行が死地に赴くに の後醍醐帝の廟前の辟 も見る人の心を揺り も見る人の心を揺り 心を揺り動かしてやまとその一行の氏名は、今の廟前の壁に鏃をもっての底名は、今地に赴くに当たり、吉野地に赴くに当たり、吉野

憂らるん 三さんだい 身^{み0} 芳り野の 死に 0) 忠言ゆう 投ず 0 廟がままぜん 楠なんし 薩さ \mathcal{O} 小^こ 0 塚が 摩ま 0) 0 が° 原は 0

痕, 壁 原 海 門 ▷

遺♥或≥從♥憂々三♥一♥糠♥奮△

烈及爲□容♥憤々代♥世、既♥躍△

千一芳一就是 思美一就一起一唯一

見一南一小陸人楠一赤一日一不一酬一不一

世世い

義ぎ

烈れる

 \bar{O}

里さり

0

前一塚季大大樓一本一样之至一足

里声魂声

慷い 慨い

義ぎ

日_{ま 0} 本と

に

遺れれる 従い答言 千年んなん

宽,

見^{み 1} る 或ま2 (1) は L_{Δ} 忠愛を 正は気き 筑?4。 紫ぃ 0 乾燥。 0 月 き42

冤なん

を

知し

らず

0

為な 1

n

鴨ぁ 呼ぁ 気き。 正なり 磅礴は 畢^{ひっきょう} 万古に 誠。 0 多言を 要せん 存ん 在ぁ 1 り

誠も なる哉な 呶ど 呶ど 何だぞ 誠。 必ず なる哉な 7

七たび 人 に に に . 生まれれ 国恩に報ぜん

た

けである。 (**第十一・** (第十一・ ある。 本に対する 根が気持ちた でこうむって でこうむって 9る忠誠の ちなどまって大宰府 うるまた、 誠の情をみるだまったくなく、 菅原道真が

美は大さればに 美されている(第十三・十 る行を内 動い句 。 と る こ 見 なって、永劫に禁いたまえ、正気が 賛れが

に

つ

満み2

以外、一物も付加することはなる必要はない。ただ誠あるの至誠であり、何もくどくどして誠であり、何もくどくどしていまれば、正にない。 なのし正 いのだ。誠気とは

かわって国恩に報いたいものである遂げる。それが日本人の心なのい。 それが日本人の心なのいに当たり、死んでも鬼となってやに当たり とを説このが、『七 いそ本本生 、質の報 でもの。 したもの。 したもの。 したもの。 でもの。 でもの。 ベ国も 、 き 道 に き き う と き 、 す を う て 四に生まれれなのだ。 であるこ であること、日本人と、日本人 だり事

歌われた。 さらに四艘を沈め、決死の部下七十余人をボートに移したが、かったので、さらに四艘を沈め、決死の部下七十余人をボートに移したが、かったので、さらに四艘を沈め、決死の部下七十余人をボートに移したが、かったので、さらに四艘を沈め、決死の部下七十余人をボートに移したが、船内を捜索すること三度、見つけられなが別な旅順閉塞の情景は小学唱歌にまとめられ第二次大戦のころまでよく、現存せず)が作られ、東京神田の万世橋駅前に杉野兵曹長と併せて銅像に軍神として称えられ、東京神田の万世橋駅前に杉野兵曹長と併せて銅像に軍神として称えられ、東京神田の万世橋駅前に杉野兵曹長と併せて銅像に現存せず)が作られ、東京神田の万世橋駅前に杉野兵曹長と併せて銅像に現存せず)が作られ、東京神田の万世橋駅前に杉野兵曹長と併せて銅像に現る旅順閉塞の情景は小学唱歌にまとめられ第二次大戦のころまでよく、歌われた。 たが、

【作者】広瀬武夫(一八六八~一九〇四)明治時代の海軍軍人。明治 月二十七日、福井丸を指揮して旅順口閉塞におもむいたが十分な効 度菊池氏から出て、父重武は豊後(大分県)岡藩士で、明治維新の 皇の大義を唱え、国事に奔走した人である。武夫はその次男。明治 場に進んだ。日清戦争に従軍して功があり、また露都に武官として、 対に進んだ。日清戦争に従軍して功があり、また露都に武官として、 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 た温ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 りているの次に上り、 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 の次に上り、 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 の次に上り、 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 の次に上り、 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 を過ぎ、東清鉄道(北満鉄道)沿線をきわめて帰った。 り、シベリア として滞在す 明治十八年、 明治十八年、 明治元年五

力な効果がな一り、同年三

201

200

も生きるも天命で